



私は小学校1年生の時から冬になると、ある方に預けられ、スキーを教わっていた。当然のことながら、スキーの技術はメキメキ上達し自信も付き、高校進学と共にスキー部に入部した。神奈川県代表としてインターハイにも出場し(成績は振るわなかったが)、大学進学した際には真っ先に体育会スキー部の門を叩いた。

敗者復活戦

都会育ちの自分と雪国育ちの選手とのレベルの違いは認識していたが、その差は予想以上に大きく、先輩たちからはある意味可愛がられた。選手として活躍できるのは100%近く無理とはわかってはいたが、最高のレベルを狙える可能性のあるところに身を置きたく、退部することなど全く考えなかった。同好会でも所属すればエースになれたかもしれないが、「ここしか自分の居場所はない」との信念でどんなに辛いことも我慢できた。

2年生になった時、当時の監督から「もうお前は芽が出ない」と言われ、マネージャーへの転身を勧められた。それからは選手への未練はきっぱりと絶ち、マネージャー業を邁進した。4年時には全日本学生スキー連盟学生委員長に就任し、自分が必要とされているとの認識をずっと持つことができた。選手としては敗者でも、そのまま諦めてしまったらそこで終わる。形は違っても、学校や部に貢献し、自分の存在意義を確認できる道は必ずある。そこに敗者復活戦があると知ったことは、その後の人

生でも大いに役立った。社会人となって、それなりの経験を積み、40歳の時、父から社長を継ぐこととなった、世間からは老舗企業と評されていた弊社もあり、若手経営者として精力的に動いて、いろいろな策を講じたが、なかなか結果を出せない日々が続いた。本来ならメーカー、商社、銀行等、ビジネスパートナーから見放されてもおかしくない状態であったと思うが、一社としてそのようなことはなく、協力的体制を堅持してもらえた。そして何よりも役員をはじめ、社員全員が誰一人欠けることなく、スクラムを組み、努力を惜しまず前進してくれた。

そのうち徐々にではあるが結果が出るようになり、何とか存在意義を認めてもらえらる企業に成長することができたと確信している。

「敗者復活戦」はどのような時代もどのような局面であっても、人間の心の中に存在する。敗北の原因を分析し、改善に繋げ、周りの協力を仰ぎ、次に生かせば、必ずや敗者は勝者になり得ると信じている。